

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2021 冬 vol.137

特集

甲賀市くすり学習館 開館10周年

新撰 淡海木間撰 82

鳥居を描いた薬箱

INFORMATION STATION

催し案内 2021 冬

MYBOOK

自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS

サンライズ出版の新刊案内

甲賀市くすり学習館 開館10周年

地場産業として売薬業が根づいていた甲賀地域には、昭和50年代以降に造成された工業団地に大手製薬メーカーも進出、「くすりのまち」として発展してきました。平成22年(2010)に開館した甲賀市くすり学習館は、本年度で開館10周年を迎え、現在、記念企画展「くすりと甲賀忍者 その知恵と技」が開催されています。

かつて薬の製造に使われていたさまざまな道具が並ぶ常設展示室



■甲賀市くすり学習館

住 所 甲賀市甲賀町大原中898-1

連絡先 TEL 0748 (88) 8110 FAX 0748 (70) 3694

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

入館料 無料

駐車場 自動車18台、自転車50台(※バスの駐車も可能)

アクセス 新名神高速道路「甲南IC」もしくは「甲賀土山IC」から約15分
／JR草津線「甲賀駅」もしくは「油日駅」で下車、徒歩約20分

取材／編集部 写真／辻村耕司



「健康」をキーワードにすれば、

いろいろな展開ができると思っています。

甲賀市くすり学習館館長 長峰 透さん

「くすりのまち 甲賀」の歴史

— 長峰館長には、本誌116号(2015年夏)で甲賀市甲南ふれあいの館所蔵の「甲賀の前挽鋸」取材した際にもお世話になりました。

長峰 当時は甲賀市教育委員会の職員で、定年退職して、当館の館長となり、まだ一年と少しです。当館は商工労政課が管轄する施設で、もともと開館以来の管理・運営は一般社団法人滋賀県薬業協会が指定管理者として行っておられました。昨年度から甲賀市が直営で管理することになったんです。

— なるほど。まず、「くすりのまち 甲賀」の歴史をお聞きしたいのですが、いわゆる配置売薬が盛んだった地域としては、甲賀のほか、越中富山と奈良県(大和)を聞いたことがあります。

長峰 富山売薬、大和売薬、近江の甲賀・日野売薬、それから九州では佐賀県の田代売薬。以上が四大売薬といわれています。同じ近江でも甲賀と日野とは成り立ちが違

うんです。日野町の方は、近江商人が業種の一つとして製薬と売薬も行ったのが始まりです。

甲賀の場合は、山岳修験道場であった飯道山の山伏が村に定着して、多賀大社の使僧としての役割を担います。お多賀さんのお札を配って各地に多賀信仰を広めていくと同時に、勧進を請け負うのが仕事で、そこで得たお金で多賀大社の造営をしたり、修理をしていました。そのお札配りの土産に、薬をつけていたようなのです。

それが、明治維新後に大きく変わります。廃仏毀釈によって多賀大社にあったお寺も全部なくなってしまい、明治5年(1872)に「修験道禁止令」というものが出されて、山伏も全員還俗させられます。そこで、今度はお札を配っていた先に薬を売り歩くようになったのが、甲賀売薬の始まりだと考えられています。

— 失業したけれど、経験を生かして自立したわけですね。配置売薬というのは、いつごろまで盛んだったのですか。

長峰 配置員さんが800、900人ほどおられた昭和30年代からはずいぶん減りましたが、いまも60人ぐらいおられるんじゃないですかね。都道府県知事から許可を得た配置員さんが、契約している複数の製薬会社から薬を仕入れて、個人で営業し



↑配置売薬に用いられた行李

※1 配置売薬 得意先を訪問して薬を置き、次の訪問時に使われた薬の代金を徴収する、日本独特の医薬品の販売法。

※2 飯道山 甲賀市と湖南市の境にある山で、標高664m。奈良時代に創建された飯道神社が南山腹にある。

ておられます。

昔は、こうもり傘を持って、角帯を締め、背中に背負った五段重ねの柳行李に補充用の薬と紙風船など土産の品などを入れ、薬箱を置いてもらっている家庭を回られました。今でも販売許可を得た地域に決まった宿があって、2、3カ月滞在しながらバイクで回っている方もおられますし。

— 行動範囲はどのくらいだったのですか。

長峰 なかなかそれがわかる記録がなく、甲賀では研究が進んでいない部分なのですが、私が知っている範囲で、北海道や青森に行っている人もいたし、九州、四国も聞いている。

— この地域に県外から製薬会社が来たのはいつ頃からですか。

長峰 塩野義製薬(シオノギ)は、昭和21年(1946)に油日農場を開設しておりますから、戦後まもなくです。

会社の出入りがありますが、甲賀市には13、14社の製薬会社があります。塩野義さん以降も滋賀県へ製薬メーカーの工場進出が続いたのは、もともと甲賀や日野に薬の伝統があつて、戦前から薬産業を振興して



甲賀市くすり学習館 館長

長峰 透さん

ながみね・とおる / 1958年、京都市生まれ。甲賀市教育員会歴史文化財課課長を経て、2019年4月から現職。

いくための基盤なり組織なりが、他の地域よりもしつかりしていたからだといえます。明治時代半ばには、個人営業間の競争による乱売なども起こりますが、やがて組合もつくられ、近代的な製薬業としての形が整えられていきます。明治32年（1899）には、甲賀郡に初めて薬を製造販売する株式会社ができました。大正3年（1914）に制定された「売薬法」によって、資格のない個人による調剤が禁止されると、家内工業的にやっていたところでも、薬剤師を雇い入れた共同製剤所などで製薬するようになります。

薬が身近な地域だったわけですね。

高齢者の方に出ると、家で薬をつくっていたとか、薬を売りに行っていたという話はよく聞きます。もともとは農業だけでは食べていけないから、農閑期に薬旅（配置売薬業）に出られるようになったのでしょうが、すでに農業のほうに副業みたいになっただけで、「自分の家は薬屋だ」とおっしゃるんですよ。

館で展示されている薬関係の品々は、どうやって集められたのですか。

明日の薬業界を担う人材育成を目指して

地域の歴史を子どもたちに伝えるのが、館の役割であるわけですね。

長峰 当館は、決して歴史オンリーではありません。奥深い歴史があつて、甲賀で薬業が発展してきたということを知ってもらったうえで、明日の薬業界を担ってもらえるような人材が育ってくれること、地域の産業振興も目的としています。

また、薬は健康にも役立つものですから健康に関する情報発信も行っています。

体験学習などに訪れるのは、市内の小・中学生が中心ですか。

長峰 すべて寄贈していただいたものです。細かいものを入れれば、1000点近くあるだろうと思います。大事なことは、これをちゃんと目録化し、薬屋さんだった方から聞き取りをすることです。この道具は何のための道具なのか、どういうことに苦労してきたのかといった話を全部集めて、モノにまつわるストーリーをふくめてしっかりまとめていく必要があります。

私は教育委員会にいた経験もあるので、これらの文化的な価値を高めていきたいなと思っています。助けていただく作業員の方にも来ていただきながら、整理を進めているところです。

そのうち薬の袋ばかりを展示した企画展などもできそうですよね。

長峰 はい。「馬印」という、近江製薬や甲賀神農会などの製薬会社が使っていた独特の商標もあつておもしろいですよ。私も由来を知らないのですが、薬袋に馬が2頭描かれていたり、跳ねている馬もあつたり「甲賀の馬印」として広く知られていました。レトロなデザインで、興味のある人も多そうです。

明日の薬業界を担う人材育成を目指して

長峰 他に、草津市にキャンパスがある立命館大学薬学部の新入生や、会社の新入社員研修にも利用いただいており、一般の大人の団体もお見えになります。

本来であれば、そうした活動を大々的に展開していきたいところなのですが、現在は新型コロナウイルスの影響で抑え気味になっています。忍者の「兵糧丸」をつくる体験学習では、水を加えながら手でこねて、小さく丸くし、最後に蒸して食べますからね。もちろん手袋をはめてやるのですが、現在は開催を取りやめています。

↓常設展示室に並ぶ薬の製造用具。写真は丸薬を数えるための匙



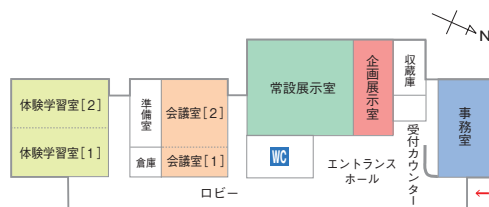
↑薬研。舟形のくぼみに生薬を入れ、軸のついた丸い円盤を前後させてすりつぶす道具



↓近江売薬株式会社「救命丸」と風邪薬「ヘブリン」の包装紙。ともに馬印の商標がデザインされている



当館の体験学習でつくるのは、材料に生薬と腹持ちのよい原料を使った「兵糧丸」という忍者の食料で、それを薬研を使い、昔ながらの方法で作っていきます。



- ↑体験学習室での「紫根染め」体験のようす
- ←染め残したい部分に、ビー玉やどんぐりを入れて、布を割り箸で挟んだり、輪ゴムで縛ったりして、染料に浸す
- ↓完成品を広げる油日小学校6年生の皆さん



できれば体験学習のようすを撮影して掲載させていただきたかったのですが、何故できませんか。

長峰「紫根染め」の体験学習でよければ、12月17日に油日小学校の6年生たちが、体験学習を行います。ムラサキという古くから根が染料に用いられてきた植物を、塩野義製薬さんの油日植物園が油日小学校と連携して校庭に植えられ、それを採取して「紫根染め」をされます。

同じ学校関係でいうと、甲南高校には「バイオとかがく」系列というものがあって、薬学の森田和行教諭がおられます。森田先生と連携しながら、当館で体験教室を開いてもらうこともあります。

令和2年(2020)10月から11月にかけては、「甲賀忍者に学ぶ薬草健康術連続講座」と題した大人向けの講座を催し、森田先生とハーブインストラクターの竹中島みちよさん、三重大学名誉教授の山本好男先生に講師を務めていただきました。みなくち子どもの森へ出向いて、薬草探しをする回もあって、大変好評でしたので、こ

※3 ムラサキ 山地に生えるムラサキ科の多年草。太く紫色の根は、古くから染料や漢方薬に用いられてきた。野生のものは数が減少しており、環境省レッドデータブックでは絶滅危惧種にランクされている。

※4 甲南高校に昭和33年(1958)に設置された「薬理科」が、平成19年(2007)の再編により現名称となった。

した連続講座は今後も続けていこうと思っています。

身近な植物に関する知識が健康につながるわけですね。

長峰 その辺に普通に生えているヨモギも、よもぎ団子やよもぎ餅はご存知でしょうが、薬効があります。止血剤にもなる。最近、甲賀では、ドクダミを栽培してどくだみ茶などを売り出そうかと考えている方もおられますので、そういう方とも今後連携していかないといけないなと思っているんです。ですから、今後、当館のあり方として、単に「所蔵資料を展示したので見にきてください」というだけではなく、薬草を生かした、健康的で甲賀らしいまちを育む拠点施設になっていきたいと考えています。

専門家の方も地元におられるし、そうした方面に興味を持つ人は多そうですね。

長峰 理科や科学に関心を持っている子どもも多いですから、企業、学校と当館がお互いに連携し合って、その子たちの興味に応えられるような活動があれば積極的に取り組んでいきたいと思っています。

また近年、健康長寿が国民的な関心事になっています。単に平均寿命を延ばすだけでなく、健康なまま長生きしたいというのがみんなの願いです。当館の場合、「健康」をキーワードにしていけば、自然の恵みである薬草に関する知識であったり、薬の正しい飲み方であったり、生活習慣病を改善するための情報発信など、いろいろな展開ができるだろうと思っています。

開館10周年企画展

「くすりと甲賀忍者」

「その知恵と技」

会期…令和3年3月31日(水)まで

山伏の薬草に関する知識を受け継いだ忍者

—— 続いては、開館10周年記念の企画展についてご紹介をお願いします。

長峰 今回の展示では、忍者の歴史の展示というよりも、忍者が使っていた忍術という術のうち、身体や精神の安定に役立つようなこと、さらに武器に用いる火薬、通信手段としての狼煙などもふくめて、科学的な知識の部分に焦点を当てました。

最初のコーナーは、忍者が実在したことを示すために、甲賀の忍者の子孫、渡辺家で発見された古文書の複製を置いています。「御忍役人」とあり、尾張徳川家に

仕えて、普段は甲賀に住みながら、いざ忍びのご用があれば尾張まで駆けつける、非常勤の勤務だったこともわかってきました。忍術は親子、兄弟といえども、秘密にしておけといったことも書かれています。

それ以外に、当企画展では、藤林保義が著したとされる有名な忍術書『萬川集海』なども用いています。

—— 次の壁面の絵図は、「飯道山惣絵図」ですね。

先に館の紹介でもお話しした、甲賀が「くすりのまち」になったルーツをもう一度くりかえすことになりましたが、最初に野山に自生する薬草に注目した人々は飯道山を拠点に活動した山伏であろうと考えられます。山伏は山で修行しますから、薬草に関する知識を豊富に持っていました。お多賀さん（多賀大社）のお札を配りながら、薬づくりも当然始めていました。山伏の常備薬として有名な「陀羅尼助」は、キハダという苦味のある薬草を使った健胃薬です。

甲賀の忍者にも、山伏は身近な存在ですし、山伏の行場でいろいろな精神的な修行や肉体的なトレーニングをする中で、薬草の知識も身につけたのだろーと思っっています。

—— 両者に交流があったということですか。

長峰 山伏の子孫から忍者になる者も現れています。例えば、尾張藩に仕えた木村奥之助は、もともと木村奥之坊という山伏の家でした。飯道山の山の中には、たくさん寺跡が残っており、岩がゴロゴロした行場

↓飯道山二ノ峰の巨岩。すぐそばに飯道神社がある
(編集部 撮影)



↑山伏の薬「陀羅尼助」の原料となったキハダ

もありました。そのような場での肉体的、精神的な訓練は忍者にも役立っただろうと思います。

平安時代の時点で近江からは73種類の薬が朝廷に進貢されていたそうですから、もともと薬草が非常に豊富な地域だったのでしょう。山伏や忍者は、たくさん生えている植物の中から、薬草を見分ける知識、生えている場所に関する知識などを継承するようになります。カキドオシ、ゲンノシヨウコ、キキョウ、クズ、ヨモギ……これらは、今もこの館の周りにたくさん生えていますから。

展示されている植物は、館所蔵の標本なのでですか？

長峰 いいえ、今回のために用意したものです。近くにある塩野義製薬油日植物園に許可をいただいて、園の職員さんと一緒に摘ませてもらったものを、ドライフラワーや押し花にしました。

そうした薬草の中でも、忍者が一番気をつけていたのが、傷薬と腹薬だといわれています。戦に出向いて槍などで突かれたら血が出る、その止血剤にヨモギを使ったり、ドクダミを使ったりしています。それから旅をして地方の水と合わないければ下痢をし

てしまいますから、腹薬も必需品でした。

次は丸い団子が並んでいます。

長峰 忍者の食料ですね。『萬川集海』の中には、飢渴丸や水渴丸のつくり方が載っていますし、山本勘助が著したとされる『老談集』には、先ほどお話しした兵糧丸が書かれています。兵糧丸は人参や山薬、ヨクイニンなどの生薬のほか、糯米粉や粳米など8種類の原料を混ぜて、それを薬研に入れて粉にしてつくりまわす。腹持ちがよく、元気になる忍者食ですね。

味はどうですか？

長峰 材料の一つの桂皮というのはニッキのことです。シナモンの原料ですから、生ハツ橋みたいな風味といえいいでしょう。分量として多いのは糯米粉や粳米、砂

糖ですから、非常においしいです。

水渴丸は喉の渴きを止める薬で、梅干しに氷砂糖を入れます。氷砂糖など、当時は非常に貴重なものでし、喉を潤すまではいなくても、唾液が出やすい作用があったのでしよう。これらは薬の知識を応用した食料という感じですね。

次は毒草の写真などが並んでいます。

長峰 毒草は、実物をそのまま展示することはできないので、江戸時代の本を紹介する形で、ケシ（アヘンの原料となる植物）などを紹介しています。例えば、有名な毒草のトリカブトは、根つこの部分を乾燥させて附子という漢方薬もつくられています。本当に薬と毒は紙一重なんです。

おもしろいところでは、『萬川集海』に「阿呆薬」というものが載っています。アサの葉っぱを薄茶に混ぜて相手に飲ませる



↑忍者が用いたさまざまな薬用植物
←忍者の携帯食3種。上から順に「水渴丸」「兵糧丸」「飢渴丸」



- ↑「兵糧丸」づくり
- 1 材料8種
 - 2 ハカリで材料を計量する
 - 3 薬研で細かく砕く
 - 4 水を加えながらこねる
 - 5 棒状に成形する
 - 6 等分に切り分ける
 - 7 両手のひらの中で転がして丸くする
 - 8 蒸し器に入れて蒸す
 - 9 完成

と、気が虚ろになるというんです。

つまり大麻ですね。

長峰 テトラヒドロカンナビノールと呼ばれる成分の作用を忍者が知っていたということになります。

他には、忍者の秘伝書に「逢犬術」という、イヌを追い払う術も載っています。忍者が一番嫌なのは、番犬にほえられることなんです。マチンという南方系の木の実が紹介されていて、犬のエサに混ぜて与えればイヌは死んでしまうと。ストリキニーネという毒素の効果で、実際、昭和40年ぐらいまで野犬狩りにマチンをもとにしたストリキニーネが使われていたそうです。他

忍術屋敷で薬の製造

次には、忍者が印を結んだイラストがあります。

長峰 「臨兵闘者皆陣列在前」という忍術の精神修法を紹介したパネルです。忍者の仕事というのは、普通の武士よりストレスがたまりやすいんです。「萬川集海」に「忍術の三病」としてあげられているのが、恐怖すること、敵を侮って軽く見ること、考え過ぎることの三つで、これらが行動のブ

にも、ツチハンミョウという昆虫がもつカンタリジンという毒素を使った毒虫の話などもありますが、こちらはそれほどの効果があったのか、ちょっと疑問です。

こちらの古文書はなんですか。

長峰 真ん中の赤線を引っ張っているとろに「毒飼」と書かれています。これは毒飼の禁止条項と呼ばれているもので、永禄13年（1570）ですから織田信長の時代ですが、甲賀では一族で「毒を持った虫を飼ったり、毒草を栽培したりしてはいけない」という掟を作っています。逆にいえば、それほど、当時の甲賀では毒が使われていたようです。

レーキとなるから、取り除こうとしました。

これも山伏の術から学んだものですが、心を落ち着ける方法があげられています。息の長い呼吸をくり返せば、精神が安定してくる、印を結んで神仏に祈る、あるいはお香をたいて匂いでリラクセスする。

どれも理にかなったものですね。ストレス社会の現代人と変わらないような……。

長峰 最後のコーナーは、現代に生まれ変わった忍者の薬ということで、いまも甲賀市の製薬会社が製造販売している「忍術丸」などを紹介しています。昔ながらの桂皮やセンブリ、エンメイソウなどの生薬を混ぜた胃腸薬です。甲賀流忍術屋敷では、ここに展示している「健保茶」も飲ませてもらえます。茅葺きの大きな民家で、多くの観光客が訪れる甲賀流忍術屋敷は、戦国時代に活躍した甲賀武士、望月家の旧宅です。それが江戸時代になると、山伏として、「万金丹」や「人参活血勢竜湯」といった薬をつくり、伊勢朝熊岳明王院のお札を配って各地を回るようになります。

↓甲賀流忍術屋敷（甲賀市甲南町竜法師）
現在も近江製剤の所有で、屋敷内の売店では、忍者グッズとともに薬草茶も販売されている



明治時代になると、望月台名会社、ついで近江製剤株式会社を設立して、敷地内に建てた社屋で製造、屋敷でも袋詰め作業などをなさっていました。

企画展のタイトルを見て、「甲賀はなんでもかんでも忍者だな」と思う人がいるかもしれないが、実際に忍者の家が製薬会社になったんですね。

長峰 甲賀の者であれば、いろいろな大将に仕官する際に火薬や薬に関する知識を売りにしたんでしょうね。甲賀の地で忍者が生まれた背景は、山伏と薬、忍者の関係を考えると、すっきりわかるように思います。

山伏の行場があって、山伏と一緒に近くの飯道山で修行する。肉体的な修行だけでなく、精神的なものも受け継いでくる。それが戦の場では、精神集中などにも役立ったことでしょう。そうした秘伝をまとめ上げたものが忍術書なんです。戦国時代は、おそらくそうしたものは口伝えであったり、体を通して身につけていったものが、江戸時代になって平和が訪れてから、文字に残されるようになったわけです。

本日はお忙しいところ興味深いお話をありがとうございました。



↑「忍者の精神統一」展示

鳥居を描いた薬箱

甲賀市くすり学習館 館長 長峰 透

甲賀市くすり学習館には、鳥居を描いた薬箱が展示されています。薬箱の上蓋には、「御薬人」や「近江国甲賀郡龍池村」「木村保生堂」等と書かれたラベルが貼られ、なかでも鳥居のマークが目をはきまします。

では、なぜこの薬箱に大きく鳥居が描かれているのでしょうか。それは「保生堂」を店名としていた木村家が、もとは「教学院」と称する山伏であったことが大きく関係しています。

↑配置売薬で顧客の家に預けた薬箱（昭和初期）



木村家は、山伏が多く住んでいた甲賀市甲南町磯尾地区を本拠とし、系図では、教学院家の祖に醍醐寺三宝院派修験となった木村宗久がおり、以後代々修験職を相続したとあり、江戸時代には、多賀社にあった天台寺院、不動院に坊人として仕えていました。坊人とは多賀社のお札を配り、勧進を得るために各地の檀那場（受け持ち地域）を回った使僧のことですが、多賀社と甲賀の山伏とのつながりは深く、宝永元年（1704）の「観音院古記録」によると82名の甲賀の山伏が多賀の坊人を務めていたとあります。こうした坊人たちによる配札活動によって多賀信仰が全国に広がり、その時にお札の土産として薬も配布したと伝わります。

ところが、明治維新により状況が一変することになります。明治3年（1870）の売薬取締規則では、神仏の御利益を語り、家伝秘法と宣伝された薬の売り方が禁止され、さらに明治5年に修験道が廃止されると、お札配りもできなくなり、甲賀の山伏たちも新たな道を模索し始めました。それが売薬だったのです。配札先がそのまま売薬の得意先となりました。木村教学院家では、多賀講の講員として布教活動をする一方で、木村保生堂という店名で丹波や丹後、但馬地方（京都府と兵庫県の北部）で配置売薬を始めるようになります。

こうして甲賀の山伏たちは生計をたてるために売薬業に転じていくのですが、木村家にあつては、近世以来の多賀社との深い関わりから、鳥居のマークを商標とし、薬箱に貼ったものと思われれます。何気ない薬箱が、甲賀売薬のルーツに関わる歴史を我々に教えてくれます。

昔の人々は、日常の労働によって仕事着が傷んでも、捨てることなく補修をし、長く着用しました。仕事着は、労働の痕跡が見えるものもあり、当時の衣生活を知る上で重要な資料として注目されています。

本展では、湖東・湖北地域で発見された仕事着を中心に展示し、衣生活資料から見える労働生活を解説。また、滋賀県立大学や現代のファッションブランドに協力をいただき、つぎはぎに着想を得て制作した作品を展示。現代の視点から芸術品としての仕事着の美しさを紹介します。



長着（多賀町山間部、個人蔵）

入館料：一般300円、小中学生150円

無料入館日：1月23日(土)・24日(日)、2月20日(土)・21日(日)、3月13日(土)・14日(日)

休館日：月・火曜日(祝日は開館)、2月12日(金)・24日(水)

■学芸員による展示解説

2月21日(日)・3月14日(日)

いずれも午前10時30分～11時

午後2時～2時30分の2回

お問い合わせ先：TEL 0749 (37) 4500

第63回企画展

琵琶湖文化館開館60周年記念 地域連携企画展

琵琶湖文化館の『博物誌』

—浮城万華鏡の世界へ、ようこそ！—

2月6日(土)～3月21日(日)

滋賀県立安土城考古博物館

昭和36年(1961)3月20日に、県内初の本格的公立博物館として滋賀県立琵琶湖文化館が竣工・開館してから、60周年を迎えます。

本展では、近年展示する機会が少なかった収蔵品の中から、ユニークで興味深い作品を選んで公開し、琵琶湖文化館収蔵資料の奥深い魅力に触れていただきます。

ました。令和2年(2020)度は、姉川合戦から450年という節目にあたります。

本展ではこれを記念し、姉川合戦とその周辺の歴史に関連する合戦図屏風や肖像画、古文書、武具などの多彩な資料を紹介します。

入館料：大人410円、小中学生200円

休館日：2月8日(月)

お問い合わせ先：TEL 0749 (63) 4611

第28回企画展 守りたい！少なくなった生き物たち —未来につなぐ地域の宝物—

開催中～3月7日(日)

滋賀県立琵琶湖博物館



絶滅が心配される動物のシンボル・ジャイアントパンダ。日本に最初に輸入されたパンダの出会えます。

私たちの身の回りには、数が少なくなり絶滅が心配される生き物がいくつも知られており、それらを地域の宝物として守り、未来へつないで行こうと、さまざまな取り組みが行われています。

本展では、貴重な標本やパネル、資料映像などを使って、生き物たちの危機的な現状と、少なくなった生き物たちを守る多くの方々による活動を紹介합니다。

入館料：大人300円、高大学生240円、小中学生150円

※別途、常設展示の観覧券が必要です。

事前予約へのご協力をお願いします

2020年10月10日(土)のリニューアル・オープン以後、琵琶湖博物館の入館には、博物館のウェブサイトの画面から事前予約が必要となりました。ご協力をお願いします。

休館日：月曜日

お問い合わせ先：TEL 077 (568) 4811

第33回企画展 つぎはぎの仕事着 —暮らしが仕立てたデザイン—

開催中～3月21日(日)

愛荘町立歴史文化博物館

特集展示 村の世界 —古絵図に見る 昔の栗東—

開催中～2月28日(日)

栗東歴史民俗博物館



「安養寺村絵図」(部分)
(安養寺南区自治会蔵)

栗東市の名前は、昭和29年(1954)に栗太郡の東側にあった4つの村が合併したこと由来し、さらにさかのぼると、明治22年(1889)に4つの村ができるまでは、大字単位が1つの村でした。本展では、栗東歴史民俗博物館が収蔵する多様な古絵図を通して、江戸時代の栗東地域に広がっていた村の世界を紹介します。

入館料：無料

休館日：月曜日、2月12日(金)・24日(水)

お問い合わせ先：TEL 077 (554) 2733

企画展 姉川合戦450周年記念 信長苦戦す！元亀争乱と湖北

開催中～3月7日(日)

長浜市長浜城歴史博物館



姉川合戦図屏風
(部分、福井県立歴史博物館蔵)

元亀元年(1570)6月28日、姉川をはさんで、浅井・朝倉連合軍と織田・徳川連合軍が対峙し、「姉川合戦」の戦端が開かれ



瀬戸内純情スクリーン

映画は夢のワンダーランド

きらいまさき
帰来雅基 著

四六判並製本 総304頁 2000円＋税

幼き日、「ベンハー」を見た翌日から映画ノートを書き始め、現在、エフエム香川の「勝手にシネマニア」パーソナリティも務める著者が綴った、昭和30年代後半からの映画にまつわる思い出あれこれ。

経営のための品質管理心得帳

山岡 修 著

A5判並製本 総128頁 800円＋税

品質管理の先人ジュランの言葉などをひもときながら、組織のタテとヨコをつなぐために行うべき組織づくりの方法を、具体的な事例も交えてわかりやすく紹介。



感性のときめき

技術と文化の融合を求めて

原 稔明 著

B6判並製本 総194頁 1500円＋税

琵琶湖の大渇水で受けた鮮烈な印象、7世代前までの過去を振り返る必要性、故郷・和歌山の「智の巨人」南方熊楠の宇宙、空海に学ぶ科学と宗教の融合など、ダム技術者としての考察を収録。



健康は歯と口から

患者さまから教えていただいたこと

井田 亮 著

四六判並製本 総74頁 800円＋税

むし歯や歯周病を予防するためにはどうすればよいのか。臨床歴50年の著者が、地元で患者さんと協働で取り組んできた歯と口の健康に取り組む具体例をわかりやすく紹介。



北近江の戦国秘話 小谷の龍

よしの
D野永正 著

B6判並製本 総278頁 頒価1000円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25(著者)

小谷山西麓の長浜市小谷D野町に父方の実家がある著者が、少年の日に父から聞いた物語をベースに紡いだ、戦乱の世の北近江物語。浅井氏三代の通史と小説を収録。(2020.10.15刊)



私のたのしみ 絵をかく・花をいける

西脇 操 著

AB判並製本 総72頁 非売品

問合先 彦根市本町二丁目3-22(著者)

過労で倒れ、小学校教諭の職を辞した著者は、奇跡的に回復後、池坊に入門、生け花の魅力にとりつかれる。若き日からの絵画作品と生け花の作品をカラーで収録。(2020.10.20刊)

受けており、前回の公開は芭蕉没後300周年の平成6年(1994)が最後です。本展は、本館の開館30周年を記念し、芭蕉翁絵詞伝をすべて公開いたします。



芭蕉翁絵詞伝(義仲寺蔵)
浮御堂へ観月舟遊び

入館料：一般330円、高大生240円、小中生160円

休館日：月曜日

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

講師：藤崎高志(当館学芸員)

会場：安土城考古博物館 NPS セミナールーム

参加費：300円 定員：各50名

お申し込み方法：往復はがきによる事前申込制(受付先着順) ※事情により行事内容や日時が変更になることがあります。最新の情報は当館ホームページでご確認ください。

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

第83回企画展／開館30周年記念企画展

芭蕉翁絵詞伝と義仲寺

2月27日(土)～4月11日(日)

大津市歴史博物館

松尾芭蕉の研究・顕彰に生涯をかけた五升庵蝶夢(1732～96)が、芭蕉の百回忌に向け、11年の歳月をかけて制作したのが、「芭蕉翁絵詞伝」です。全長40mにも及ぶ松尾芭蕉の伝記絵巻である芭蕉翁絵詞伝は、義仲寺の寺宝として長く門外不出の扱いを

入館料：大人600円、高大生360円、小中生無料
休館日：月曜日



源平合戦図屏風(左隻) 狩野氏信筆
(琵琶湖文化館蔵)

■企画展関連博物館講座

「琵琶湖文化館60年の歴史と知られざる収蔵品の世界」

2月6日(土) 午後1時30分～3時

講師：井上優氏(滋賀県文化財保護課)

「琵琶湖文化館所蔵の考古資料」

3月6日(土) 午後1時30分～3時



聞き書き 朽木小川^{こがわ} しこぶちさんと奥山暮らし歳時記

榊 治子文／榊 始写真
A5変形並製本 総136頁 1600円＋税

高島市朽木小川に大阪から夫婦二人で移り住んだ著者が、語り言葉をそのまま用いて集落の寺事、祝い事、普請、山仕事、麻布作りのことなどをまとめたフォトエッセイ。

近江の神道文化

宇野日出生 著

A5判並製本 総120頁 2800円＋税

集落移転にともない遷座した長浜市余呉町の神社、台風による土砂崩れで倒壊後、再建を果たした五百井神社（栗東市）など、具体的な事例をもとに神道文化の姿を考察。『滋賀県神社庁報』の好評連載を単行本化。



細谷卓爾の軌跡 水俣から琵琶湖へ

関根英爾 著
四六判上製本 総332頁 2800円＋税

チッソに入社後、水俣病の問題を知らなかったことに大きなショックを受け、各地の公害事件や労働災害の支援活動を行った細谷卓爾。滋賀県における環境系協会の立役者の歩み。

えつこさんとムラサキ公園 ALSのおばちゃんの話

すみたまき 作／いずもしげこ 絵
A5判上製本 総48頁 1100円＋税

ALSという病気になったえつこさんはもうピアノを教えることができないが、わたしにパソコンでお話をしてくれた。明るく前向きに生きるえつこさんのことを書いた児童書。



表紙写真 薬屋がさまざまな薬種を入れるために用いた百味筆筒

編集後記 甲賀市くすり学習館では、ロビーを使って、「新型コロナウイルス退散祈願!! 疫病 除けのお守りと祈り」と題したテーマ展示もなっていました。例年であれば7月23-24日に甲賀市甲賀町の大鳥神社で催される「大原祇園祭」（今年度は開催中止）に用いる花蓋の花（ボタンの造花）も展示されています。この花は疫神を乗り移らせる依り代で、若衆が青竹で打って花蓋を壊した後、参拝者が奪って、持ち帰り、家の戸口に差しておく疫病除けになったそうです。 ⊕



淡海文庫 67 近江の狛犬を楽しむ

小寺慶昭 著
B6判並製本 総202頁 1500円＋税

名工佐吉の狛犬、信楽焼狛犬、湖南に集中する建部式狛犬など、滋賀県内でも地域ごとに特徴がある。近江の狛犬1385対を調べた著者が、狛犬との楽しみ方をユーモアも交えて指南。

琵琶湖博物館ブックレット12 近江路をめぐる石の旅

長 朗男 著

A5判並製本 総128頁 1500円＋税

近江には古くから石積みや石の加工技術も育まれ、同時に石の風物や伝説が数多く生まれてきた。近江の旧街道をめぐりながら、太古の火山活動や人の営みが残した石の遺産を地学的な知見も交えて紹介。



これ たか しん のう 惟喬親王伝説を旅する

中島伸男 著
B5判並製本 総382頁 3500円＋税

椀や盆をつくる木地師の祖神として崇められる惟喬親王の「伝説」に魅了された著者が、滋賀県はもとより、京都・大阪に残る親王の事績、石川・福島にも残る伝承地を訪れた歴史紀行。

自費出版年鑑2020

NPO法人日本自費出版ネットワーク 企画

サンライズ出版 編

B5判並製本 総124頁 2000円＋税

カラーで第23回日本自費出版文化賞の受賞作15点の内容や受賞者のことば、選考理由などとともに全応募作603点の書誌情報を収録。第24回募集要項つき。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先